笹山久三 sasayama kyūzō

河出書き下ろし長篇小説叢書

飢餓船

河出書房
kigabune

116520

河出書き下ろし長篇小説叢書

饑餓船

きがふね
kigabune

笹山久三
sasayama kyūzō

河出書房新社

570747

飢餓船（きがぶね）

一九九〇年一月二〇日　初版印刷
一九九〇年一月三〇日　初版発行

著　者　笹山久三
装　幀　菊地信義
装　画　永畑風人
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電　話　四〇四―一二〇一（営業）
　　四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二
印刷　暁印刷株式会社
製本　大口製本印刷株式会社
© 1990　Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-00607-8

飢餓船

（き）（が）（ぶね）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

シャッターの下ろされた商店街の長い通りは、ずっと向こうの大通りに遮られている。それでも、伝統のある街であることを演出しているかのような街灯と、規則的に植えられた街路樹が、大通りを隔てた商店街がひとつのものであることを示すように延々と続いている。デモ隊の長い行列が、大通りを渡りながら、時折遠い獣の咆哮のようなシュプレヒコールを響かせている。ハンドマイクの叫びも、そのあとに響く群衆の放つ音も、何を言っているのか聞き取ることは出来ない。その遥か先の方から響いて来る宣伝カーの絶叫の方がむしろ鮮明だ。

大通りの信号が赤になって、デモ隊の流れが車の流れにせき止められた。耳を凝らせば、遠くに隊列の行く音がある。車の流れる音に掻き消されそうに遠くなってしまったシュプレヒコール

は、解散地点に近付いた労組のものだろうか。商店街が国道に切り取られた向こう側の角で、パチンコ屋の派手なネオンサインが同じ動作を飽きもせずに繰り返している。原色の単調な踊りを、辺りのビルや街路樹が僅かに映している。

上空を雲が流れていた。夜を忘れた都市に染められた夜の雲が、ビルの谷間に僅かに顔を出した空を次々に通り過ぎて行った。

「シュプレヒコール！」

「よーし！」

突然大声を張り上げたスピーカーに、周囲の群衆が呼応した。夜を映して黒ずんでしまった旗の群れが、それでも、街の明かりに赤を浮かばせてゆっくりとはためきながら動きだした。

「国鉄分割・民営化ハンターイ！」

「……！」

周囲で起きた流れに身を任せて歩きながら、佐倉秋雄は自分の中に戻って行った。とりとめもなく、出口さえない思いの中に……。

「俺は、職場で毎日神経をすり減らしてるんだ。それを何だ、毎日まいにち。家庭ってもんはな、ホッとするところだろ。これじゃ職場にいたほうがましってもんだ。頭が変なんじゃないか」

「ひどいこと言うのね。私の気持ちなんか、ちっとも考えないのね」

「だから、なんなんだ」

「不安なのよ。自分の立ってる足場が落ちて、闇の中に吸い込まれて行く夢をみるの。何度もよ。起きてるときだって、そんな気分に襲われるときがあるわ」
「だからって、どうなるもんでもないだろ。先行きが不安だって俺のせいかよ。みんなおんなじなんだ」
「あの話考えてって、いつも言ってるじゃない。今日も電話があったわ」
「また、五十嵐か。いくら、お前のおじさんでも、話のもってきかたが不自然だろ。俺に話があるんなら、直接俺に連絡すればいいじゃないか。下心があるんだ。お前をゆさぶって、俺がヤツの軍門に下ったことを確認してからでないと、俺には会えないんだ。あいつは、そんな人間だ。わかんないのか、そんなことも」
「やめてよ、悪口なんか。私の叔父よ。悪いようにするわけないじゃない」
「馬鹿じゃないか、お前は。あいつだって助役だろ。管理職の間でも競争があるんだ。K労から何人脱退させたかで、新会社に行けるかどうかってな。あいつは自分のためにやってるんだ。お前なんかのために何をするって言うんだ。利用されるだけだ」
「でも、何もしないよりはずっとましだわ」
「何もしないとは何だ。一人の首も切らせないように頑張ってるんじゃないか」
「まやかし言わないでよ。頑張ってどうにかなるの？　どうにもならないことぐらい分かってるわよ。自分のことが大事よ。仲間だとか、人間関係だとか、そんなことは聞き飽きたわ。家族は

どうなるの。私や加奈子はどうなってもかまわないの！」
「何をしろっていうんだ？　俺に……。まさか、お前」
「言ってないわよ、そんなこと。叔父に会ってって言ってるだけじゃない」
「何のために会うんだ」
「おじさん言ってたわ。このままK労に引きずられて行ったら人活センターに入れられるって。そうならないように何とかしたいって」
「そら見ろ。本音だろ、それが。お前と五十嵐のな」
「K労がそんなに大事なの！　私や加奈子のことはどうでもいいの。K労じゃなくたっていいじゃない。他の組合だっていいじゃない！」
「何だ！　その言い草は」
「不安なのよ、自分達だけは大丈夫って安心が欲しいの。こんな毎日じゃ、気が変になっちゃうわ。クビになったら、このマンションのローンだって払えないのよ。加奈子も来年は幼稚園よ……」
俺は、もう話を聞いていなかった。由利子の声と姿が自分から遠のいたように感じたのはなぜだろう。あのとき俺は、自分の体全体がしこりのように固まってしまうのではないかと感じながら黙っていた。はりつめていた気持ちも、過敏になって病んでいた神経も、動くことを止めたかのように固まって行った。その中で過去が渦巻いていた。由利子との長く重苦しい口論の日々が

腐りかけた血膿みたいにどす黒くなって体に満ちてくるように……。楽しかったはずの結婚生活が、過去に味わったどんな苦渋よりも耐え難いほど苦痛に感じた。

「……毎日、お酒のんでばっかりで……」

そのときだったろうか。由利子の声が、そう聞こえたのは……。

「誰が酒飲みにしたんだ！　飲まなきゃ帰れない家庭にしたのは誰だ！　俺の人生をボロボロにしたのは誰だ！」

「自分のことだけじゃない！　私達のことなんか……」

「うるさい！　いやなら出て行け！」

俺はそう叫んで由利子を打ちすえていた。自分の中で何かが切れてしまった感じがあった。

あのとき由利子は何を思っていたのだろう。黙ってうなだれてしまった由利子のうなじがやけに白かった。俺は、その白いうなじに近寄れない何かを感じながら黙っていた。それとも、そう感じたのは、俺の気持ちの中だけのことだろうか……。あのとき由利子は、俺の言葉を待っていたのだろうか……。

「だんけつ・よーい！」

突然割り込んで来たスピーカーの絶叫に促されて、秋雄は反射的にその構えを作った。

『これを条件反射とでもいうのだろうか……』

そう思って苦笑してから考えることをやめた。気分がのることもない団結ガンバロー三唱を意

識の外に感じながら、それでも周囲の動作に自分の体の動きを合わせて、ぼんやりと流れて行く光景に気持ちを委ねていた。集会の風景が、意味もなく繰り返されて行く車や人ごみの流れに溶け込んでしまったかのように遠かった。

『流れ解散とはうまく名付けたものだ……』

集会が終わって出来た人の流れを見ながら、秋雄はそう思った。地下鉄に向かう流れ、国電に向かう人の流れ、私鉄の方角を目指す者。明らかに裏通りの酒場街に向かって歩き出した人々。デモ行進の隊列が、思いおもいの方角に流れ出して行った。秋雄は、それを見送りながら取り残されてしまったような寂しさを覚えた。家に帰る気持ちには、どうしてもなれなかった。

「よっ！」

突然、背中に触られて後ろを振り返ると、浜口の顔が笑っていた。

「あぁ、ハマさん……」

「ハマさんじゃねえよ、なに暗い顔してんだよ。葬式行列みてえによぉ」

「見てたんですか？」

「見なくたって目につかぁ。一人で葬式行列やってんだからよ」

「ハマさんも人活センターなんかに入れられちゃって……」

「なんの、なんの、ピンピンしてらあ」

秋雄は、自分の話題から話をそらせたい気持ちで投げ掛けた挨拶を、聞き流すようにして笑っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た浜口の笑顔に軽いたじろぎを覚えた。自分のことよりも相手のことに関心を集めているときの表情である。

「なんかあったのか？」

次に出て来た言葉は予想したとおりだった。

「いや、何でもないですよ」

「まっ、いいや。飲みにいかねえか。組合から行動費がでてよ。潤ってんだ、ここがよ。ちびっとな」

浜口は、そう言って笑いながら、みずおちの辺りを軽くたたいた。むきだしになった歯が、やけに白く見えた。日焼けしているのだ。

「よっしゃ、行くべ」

秋雄が態度を決めかねているのを見て取ると、浜口は彼一流の強引さをあらわにして畳み掛けた。

「おごるからよ」

そう言って腕組みしてきた浜口の目が潰れていた。笑うと潰れてしまう目は、誰にでも溶け込んでしまうような力をもっている。

「ああ、いくべ」

浜口の口まねをした気持ちが、秋雄の中で軽く揺らいだ。

浜口の後ろに従って歩きながら、秋雄はまた自分の中に戻っていった。
……あの日から由利子は口を開かなくなった。お互いが何も共有し得ないで寝起きを共にしている生活が俺には耐えられなかった。こんな女だったのか……。その言葉がいつも俺の中をグルグルまわって離れなかった。あの日、そんな気持ちにつき動かされるように由利子をなじってしまった。
「出て行かないのか」
「……」
「どうなんだ」
「……」
「別れてくれるんならマンションなんか売り払って金は全部やる。加奈子もおれが引き取ってもいい。お前が育てるんなら、養育費も払う」
「そんなにいやなの？　私が」
「ああ、だまされたと思ってる。俺のやってることに理解があって、一緒になったのかと思ってた。そんなことをしゃべってたからな。ほれてたのは、俺にじゃなくって安心になんだ。相手が誰だって良かった訳だろ。セックスができて、銭を運んでくればな。娼婦だな、まるで。安心が壊れかかったら、それを壊さない為に、俺を壊そうとする」
「……」

「お前が出て行かないんなら、俺が出て行く。銭は入れてやるから、安心しろ。いいんだろ、それで」

俺は、そう言って立ち上がった。由利子は何かを言おうとして立ち上がりかけたが、襲われた屈辱感に押し戻されたような表情で座り込んだ。打ちのめされたようにうつむいて身じろぎもしない由利子を背中に、俺は着替えを鞄に詰め込んでいた。本当に俺は出て行こうとしていたのだろうか。確かに、俺は、口に出した残酷な言葉に快感のようなものを見ていた。それでも、俺が求めていたのは、由利子と別れることではなかった。ずっと昔の……いや、五十嵐が由利子に揺さぶりを掛けて、由利子が、まるで言葉の奥底にあるはずの思考さえ失ってしまったかのように俺を責めたてるようになる前の、あの頃の生活に戻りたかっただけだ。あの時も止めて欲しかったのかもしれない。それでも、あの毎日には戻りたくなかった。そこに戻るぐらいなら、生活そのものから解き放たれて自由になりたかった……。

「ここだ。覚えてるだろ」

浜口の声に呼び戻されて目を上げると、ずっと以前、学習会の帰りに何度か立ち寄ったことのある小さな酒場があった。

「久し振りねぇ」

「ああ、金回りがいまいちでね」

カウンターの中の女に浜口が軽く声をかけて入って行った。

「あら、めずらしいじゃない」
「おぼえてますか」
「少し老けたのかな」
「おたがいにね」
「ごあいさつね」
「おたがいにね」
秋雄が、そう言って笑うと、おかみは、それに釣られて愛想笑いをよけいに崩した。客は自分たちだけのようだ。
「焼酎のお湯割り二つ。それから、煮込み二つ」
浜口は、秋雄には何も聞かないで、そう注文してから「だなっ」と笑顔を向けた。
「あぁ……」
「お前とも随分飲み歩いたからな、あのころはよ。学習会の帰りにゃ必ずな」
「あぁ、あのころは金が自由になったから。学習会続いてるんですか、まだ……」
「まあな。今じゃ、飲みにいくこたぁめったにねえけどな。生活抱えたしよ、みんな。会場に酒を持ち込んで来て、打ち上げコンパばっかりだ。いつの間にかよ」
「今、何やってます？　学習会は……」
「いいじゃねぇか、その話は。まずは乾杯だ」

浜口は、そう言ってカウンターに差し出された焼酎のお湯割りを軽く差し上げた。秋雄は、浜口の仕草に応えながら、その話を避けようとする浜口の心遣いを感じていた。

共働きをしてマンションの頭金がたまったからと由利子にせがまれてマンションを購入した。ローンに追い掛けられているのに、由利子は子供を欲しがって、欲しがるままに加奈子を産んだ。そして、それを理由に勤めを辞めてしまった。一人の収入だけでローンを返済し、生活をしていくという無謀なやりくりの中で学習会をはなれた。学習会メンバーであり続けることはできたかもしれない。しかし、いくら勉強をしても、肝腎の手足が生活に縛られてしまった。何をしなければいけないかが分かっていても、分かったとおりには動けないことばかりだった。頭と手足が分離して、それでも何かをしゃべっている自分のことが、つらいほどにやり切れなくなってしまったころ学習会に向かう足が重たくなった。それからは、好きだった本を読むのでさえ苦しくなることがある。

よく分かるからこそ読めない……。

こんな気持ちは誰にも説明したくなかった。あのころからだろうか、由利子への不信感がくすぶり始めていたのは……。

「なに考えてんだ？」

「いや……。どうなんですか？　人活センターの方は」

「どうもこうも、このとおりよ……」

浜口は、自分の日焼けした顔を指して笑った。そして続けた。
「……しってんだろ、お前も。あそこは人材活用センターなんかじゃねぇ。人間の誇りってやつを粉々に砕くための収容所だ。炎天下にゃ、看守付きの草刈りだ。意味のある場所なら分かるが、やってる所は土工線だぜ。打ち捨てられっちまった領域だ。昨日も一人倒れた。過労でな」
「長井さんはどうしてます?」
「あぁ。たしかあの人、お前んとこの職場だったな」
「ええ」
「人活に来たときにゃ大変だった、沈んじゃってな。もう浮かんでこねぇのかって思ったぐれぇだ。なんたって、管理職に取り囲まれて連行されるように収容されたんだからよ。罪人扱いだな。近ごろは頑張ってっけどな……」
秋雄は、まだ続いている浜口の話を聞きながら、分会長の長井が人活センターに収容されてから起きた職場の変化を思っていた。長井は事務の職場には珍しいボス的人物だった。仕事を知っていることを組合運動の力に変えてしまうだけの組合運営のあり方に反発を感じたことはあるが、組合の団結の形が長井の力で保たれていたことは否定しようもなかった。当局は、組合運営の弱点を知り尽くしていたのか、長井を人活センターに収容して職場から隔離してしまった。長井がいなくなってしばらくたった今の職場には、お互いがお互いの細かい変化に拘泥し、心理の糸でお互いを監視し縛り合うような重苦しさが漂っていた。支え合うのではなく、牽制し合うことで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com